

1. 信仰によって、彼らは、かわいた陸地を行くのと同様に紅海を渡りました。エジプト人は、同じようにしようとしましたが、のみこまれてしまいました。(11:29)
 - a. イスラエルの民が紅海を渡った出来事は、隷属からの自由を象徴しており、イスラエルの歴史の中でも最も大きなイベントと言える。新約時代ではこれはバプテスマに相当し、罪からの解放を表している。
 - b. これは超自然的な出来事であった。イスラエルの民は正式に出ていくことを許されたにもかかわらず、パロの気が変わりエジプト軍は後を追ってきた。イスラエルがパロの部隊と海に挟まれた時、神はモーセに杖を掲げるように命じ、そのとおりにすると海は二つに分かれた。
 - c. 聖書には、信仰によって彼らは紅海を渡った、と書かれている。しかし神が海を二つに分けられることを予想した者はいなかったであろう。神が海を分けられることを皆で信じよう、とモーセが言ったわけではないし、エジプト軍がそれを信じなかったので水にのまれたわけではない。私たちは時として信仰をそのように捉えることがある。強く信じるとそのとおりになり、信じなければそれは起こらない、というように。
 - d. 信仰を単なる強い信念だと考える危険性は、あの人は信仰が足りない、あの人の信仰はすばらしい、というように人やそれぞれのおかれた立場を不当に裁いてしまうことにある。
 - e. ここでの信仰は、神からモーセに海を渡るようにという明確な指示があり民はそれに従った、というものであった。一方、パロもイスラエルを去らせよという明確な指示を受け、最初は従ったものの、やはり逆らってしまった。パロは信仰を主からの言葉にではなく、彼自身とその軍隊においてしまったのである。
 - f. 信仰とは、「信じればそのとおりになる」ことではなく、「神を信じ、より頼み、従っていく」ことである。

2. 信仰によって、人々が七日の間エリコの城の周囲を回ると、その城壁はくずれ落ちました。(11:30)
 - a. エリコの城壁が陥落した際、ヨシュアはモーセのように杖をかざしていたわけではなかった。民の中にはヨシュアにそのように進言する者もいたに違いない。「モーセが手を上げ我々は戦いに勝った。モーセが手を上げ我々は紅海を渡った。おまえも壁の前に立ってモーセのように手を上げてくれないか。」とヨシュアに頼む者もいたであろう。
 - b. 幸いにもヨシュアはモーセが教えたとおりにした。そしてもっとも大切なのは主が命じたこと、すなわち信じ従うことを実行した。主がヨシュアに城壁の周囲を回るように命じた時、それは軍隊としては愚かに見えたかもしれないが、ヨシュアは軍隊の力ではなく主を信頼し、「主よ、あなたが回れとおっしゃるなら回ります」と言われたとおりに従った。
 - c. 時として私たちもクリスチャンとして、また教会としてイエスが私たちの主であることを忘れ他のことに権威をおいてしまうことがある。そのようなことはあからさまに口に出さずとも行動や態度に現われる。例えばある場所で主が素晴らしいミニストリーを働かれた、という時に、何かのやり方（スモールグループ、ヴィジョンステートメント、預言的ミニストリー、など）が良かったのだろう、と言う。ヨシュアもモーセが成功したのは杖をあげたからだ、とか、モーセもアブラハムが認められたのはひとり子をささげたからだ、だから同じようにしよう、ということもできたかもしれない。しかし主は私たちが形ややり方ではなく主ご自身に信仰をおくことを喜ばれる。

3. 信仰によって、遊女ラハブは、偵察に来た人たちを穏やかに受け入れたので、不従順な人たちといっしょに滅びることを免れました。(11:31)
 - a. 誰の目からもまず滅ぼされるべき存在のように見えたラハブは救われた。それは彼女が自分は助かることを強く信じたからではなく、神に信仰をおき、人の目よりも神を畏れたからである。
 - b. ラハブの信仰は、超自然的ではないという意味ではこの中で最も一般的な例だと言えよう。彼女は神を畏れたので偵察に来た人たちを穏やかに受け入れることができた。主への畏れというのは信仰に生きるための最初のステップである。イエスが私たちの主であることを常に忘れず、またそのことを時々意識しながら主に信頼し、従い、信仰に歩いていこう。